

山に親しみ山に想う

—小さな探検・即身仏バッター (23)

<文・写真> 岡本

2010年11月6日、西武秩父線 芦ヶ久保駅から丸山、大野峠を經由して芦ヶ久保駅に戻る周回コースを歩いた。コースタイムが4時間弱のところを5時間たっぷり掛けた悠々たる山行であった。丸山山頂の二階建て展望台から360度の眺望、山容が明白な武甲山、両神山などの山座同定を楽しんだ。

丸山山頂からは大野峠方面に下山した。展望台から3分ほど降りた先にある電波塔手前の雑木林は、小春日和の柔らかな陽光を浴びて生き生きとして明るい。陽光を全身に受けようとラジオ体操するように両手を広げ背筋を伸ばした。体を元に戻して視線を何気なく雑草に移すと、茎に止まっているバッタが視界に入った。バッタを捕えようと足を忍ばせ、眼はバッタに焦点を合わせてゆっくりと迫った。バッタの姿が視界の中で徐々に大きくなった。ふと不思議な感覚に捉われた。子供の頃からバッタを手掴みしようと近づき、寸前で感づかれて逃したり、運良く素手で捕まえたことがあるが、そのいずれの時にも感じた緊迫感、その緊迫感を逃したような感覚なのだ。普通なら、伸ばした右手を素早く右から左に回転させるようにして、あるいは上から押さえ込むように、バッタをわし掴むのであるが、そうする気にならず親指と人差し指で摘まむようにして近づいた。逃げられるのではと一瞬思ったが、バッタはそれでも飛び立たず動かない。変だなと思い、更に近づいて見ても、バッタは雑草の草茎を抱きかかえ死んだように動かない。不可思議に思って手を引っ込め、凝視した。完全なる姿で死んでいた。



バッタの写真を撮ることも忘れ、凝視し続けた後、「何だ、死んでるのか」と妙な気分につわられて歩き出した。歩き出してから、バッタの止まっている草茎を持って来ればよかったと一瞬思ったが、踵を返すことはしなかった。歩きながら、バッタは草茎を抱えて死ぬものだろうか、これまでそのような死に様を見たことがあっただろうか、否なかった、初めてだ、などと思い巡らした。そして最後になって、変なバッタもいる筈、あのバッタは意図的に目立つ草茎を抱きながら即身仏の真似をしたのかも知れないと、変てこりんな結論を出して自らを納得させた。

バッタは卵を地中に産みつけた後は、冬にかけ低体温症や食糧不足で死に瀕すると、落ち葉の下を死に場(死処)として死ぬのではないかと思う。夏にあれ程多く見てきたバッタの死骸を冬に見ないのはそういうことではないか。蟬の死骸を街の道路でよく見かけるが、山で見たことはない。即身仏バッタは落ち葉を求めず、地上高く身をさらす草茎を死処としたのか？

昆虫事典やネットでバッタの死について調べてみた。概略次のような内容である。

「バッタが草茎に抱きついて死ぬという死に方は、エモンファガ・クリリという糸状菌に犯されたバッタにみられる現象で、この菌に犯されたバッタは早朝にゆっくりと植物の上に登り、やがて草茎を抱きかかえ、夕方までに死に至るそうである。糸状菌がどうしてバッタに取りつくのか、どうしてバッタを草茎に登らせるのか、そのメカニズムはまだ究明されていないという。」



即身仏のバッタをその後は見たことがなく、写真を撮る機会がなかったので、ネットで探し当てた即身仏バッタの写真を掲載する(写真①)。即身仏バッタは後ろ足を体より下に降ろして草茎に抱きつくように止まっているが、生きているバッタの写真をネットで見た限りでは、どれも後ろ足は体側に付けて瞬時に飛躍できるような体勢をとっており、下方に伸ばし草茎に抱きついているものはなかった(写真②)。

もう一度、即身仏バッタに邂逅することになれば、丁重に拝んでみたいものだ。

(了)

(注) 即身仏：修行者が瞑想を続けて絶命しミイラになった物理的な身体が仏になること、密教に由来、即身成仏とは別。